

正念場の年 希望を持って進もう

労働組合が統合します

4月末に開催された労働組合の臨時大会をもって、ルネサステクノロジ労組とNECエレクトロニクス労組との統合が正式に承認されました。現労組は7月に解散し、新たに組合員数1万人を超える大労組として「ルネサスエレクトロニクス労組」が発足します。労組にとって最も重要なのは組織化であるとの観点から、この統合を歓迎します。

しかし、従来の組合費が基本給の1.1%だったNECエレクトロニクス労組の組合員には、新労組の組合費が一気に2倍近くに上がる事に不満も多いと聞きます。これに対し労組執行部は、今後の合理化推進による組合費の見直しを約束しています。もちろん組合費の負担減も大切ですが、春闘や労働条件改善において、より大きな力を発揮できる労組になるべく、大きく発展することに期待いたします。

2012年度決算の模様

5月9日（水）に、会社は2012年3月期における通期決算の概要を報告しました。

昨年度は626億円の赤字

昨年度の売上高は8831億円となり、1兆円を大きく割り込みました。前年比では22%の減となっています。売上が大きく減少した原因は、昨年の震災、タイの洪水、超円高、欧州や中国の経済環境の悪化などであると説明されています。

外部の反応は？

ルネサスの株価は、2月末のエルピーダの破綻後から下落を続けていましたが、5月9日の発表のあと、急激に値を下げています。5月10日は、前日の終値の419円から、一気に60円も値を下げ、最安値を更新しました。今回の会社発表で、来年3月期の業績予想値を示

さなかったことが、「100日プロジェクトの約束である純損益黒字化を達成する見込みが無くなったからではないか」との憶測を生み、市場に不信感を与えている為であると推定できます。

希望を持って進もう

このように、大変厳しい状況で2012年度がスタートしました。さまざまな外的要因のあった2011年度の業績が赤字で終わったのは無理からぬ事としても、確実に費用を削減し、損益分岐点を下げた私たちの努力と成果には自信を持って良いと思います。あとは売上拡大を目指すのみとなったルネサス、過去の反省を活かして的確な経営戦略を打ち立てることを経営者に望みます。また、私たち労働者に出来ることは、自分の担当する業務を着実に遂行していくことに変わりなく、希望を持って、まじめに日々の仕事に取り組んで行くことが、より良い結果に繋がるものと確信します。

会社の統合が進んでいます

ルネサスエレクトロニクス社として3年目を迎えました。この春から、職群等級や賃金制度、各種勤務制度、福利厚生制度などの人事制度が一本化されています。また各種のシステムも統合されて、いよいよ「ひとつの会社」として融合が深化しつつあります。4月の人事異動で、IBRTとIBNECエレクトロニクスの人的交流も更に進みました。工場では、クロス生産（製品の相互乗り入れ）も本格化しています。

しかし、統合の最前線では、やはり苦勞が多々あるようです。システム統合による大小の不具合の数々、新システムに適應する苦勞、上長と部下の出身会社の違いによる考え方の違い、試作品の投入にも苦勞するクロス生産など、さまざまな話を耳にします。こうした問題を乗り越え融合を積極的に推進しようとする努力と、不本意ながら障害やトラブルに費やされる勞力の、いずれにも敬意を払います。

ルネサス懇

ルネサス関連労働者懇談会 2012年5月 No.8

E-Mail : renesaskon@gmail.com

Web : <http://www.renesaskon.net/>

住所 : 東京都港区三田3-2-20 電機労働者懇談会気付
TEL : 03-3455-6006 FAX : 03-3451-3595

NECセミコン重層偽装請負訴訟

— 4. 20原告証人尋問、7. 27結審へ —

熊本地裁における4月20日の第11回期日では、原告3名の証人尋問が行われました。これまでの原告および被告3社（NECSKY（現ルネサスSKY）、NECロジスティクス、日本通運）の代理人への尋問の中で、裁判官は主に①採用時の状況、②作業現場の実態、③解雇時の状況について証言を求めました。被告3社の各代理人は、各自の会社に影響が及ばない様な証言をしようとする姿勢が見られましたが、そのために各代理人の証言を付き合わせると矛盾が生じる結果となりました。それは仮に、現場における指揮命令等がNECSKYから為されていたのが事実であれば、これは法的に「請負」（あるいは業務委託）の範疇では無くなりますし、逆に請負先の指揮命令への関与が無かったのが事実であれば、多重請負による業務丸投げの「人ころがし」や、日通のピンハネの実態が浮き彫りになると言った具合です。

「労働者はモノではない」「雇用は正規を原則に」と要求して、約3年間に亘りたたかってきた本訴訟も、次回第12回期日（7月27日）で結審となります。原告団と支援者一同は、結審に向けて「公正判決を求める署名」1万筆に取り組み、判決まで気を引き締めてたたかう決意です。 <原告団の報告より。>

エルピーダの破綻について思うこと

日本国内唯一のDRAMメーカーであるエルピーダメモリが、2月27日に会社更生法の適用申請をしたニュースには、少なからず衝撃を受けました。NEC、日立、三菱のDRAM部門を統合したエルピーダは、私たちルネサスとは兄弟会社のような存在でしたし、かつて共に働いた仲間が、今でも多く在籍しているからです。

会社更生手続き中のエルピーダは5月6日に、米のマイクロン・テクノロジー社を支援企業に選んだと報じられました。外資の傘下に吸収されることになったのを受けて、「日本国内のDRAMメーカーが消滅した」との報道が目につきます。かつて世界のDRAMの8割を独占した日本企業ですから、感傷的になる気持ちも分かります。

しかし、マイクロンがエルピーダの国内拠点と雇用を当面維持するとの方針を出していると聞くと、改めて「日本企業であることの意義」について考えさせられます。会社というのは、必ずしも倒産した途端に、こっぴみじんに消滅してしまうのではなくて、エルピーダのように事業が継続し、国内の雇用も（当面は）守られ、日本人が過去に培った技術が生き続けることもあります。仮にルネサスが破綻したとしても、それはおそらく同じでしょう。一方で、莫大な黒字を計上している日本のメーカーの中には、日本企業の体裁を保ちながらも、国内拠点を閉鎖したりして雇用を減らしつつ、海外への進出割合を増やすケースも多く見られます。そうすると、日本で普通に働く労働者にとっては、必ずしも日本国籍の企業であり続けることが善で、外資に買収されるのが悪とは言えなくなってきます。

それからもう一つ。エルピーダの社員もきっと、ルネサス社員と同じように頑張っていたはずですが、それでも倒産してしまいました。もちろんエルピーダ破綻の主因が社員の働きの悪さにあったとの報道は見かけません。むしろ、日本国の産業政策と、個々の企業の経営戦略に問題があったとするものが殆ど全てです。したがって経営戦略こそが企業の浮沈の鍵を握っているのが現実なのかもしれませんが、そうかと言って可能な限りベストな経営戦略を取れば、今のルネサスを100%持続できるとの保障もありません。結局のところ、企業は倒産する事もあると認め、では企業に依存し過ぎている私たちの生活を変えて行くには、どうしたら良いのかを考える必要があると思っています。

編集後記 2月末のエルピーダ破綻のニュースと、5月9日の3月期決算概要の報告によって、今のルネサスの置かれた厳しい状況について、改めて認識させられたように思います。今回のピラの最後に、会社に依存しすぎる生活の問題について書きましたが、ではどうすれば良いのかについて、この限られた紙面では書ききれません。そこで、ルネサス懇として討議した内容については、あらためてホームページにて紹介したいと思います。